



**Data**

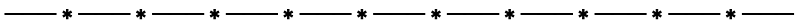
監督・原作・脚本：山田洋次  
 出演：渥美清／倍賞千恵子／吉岡秀隆／後藤久美子／前田吟／池脇千鶴／夏木マリ／浅丘ルリ子／美保純／佐藤蛾次郎／桜田ひより／北山雅康／カンニング竹山／濱田マリ／出川哲朗／松野太紀／林家たま平／立川志らく／小林稔侍／笹野高史／橋爪功

## 👁️👁️ みどころ

1969年のシリーズ第1作からちょうど50年。1997年の渥美清の死亡から22年。あの寅さんがシリーズ第50作として戻ってくる。

『お帰り寅さん』と言っても、主役は甥っ子の満男で、寅さんはチラリチラリだけ。しかし、博・さくら夫妻はもちろん、リリーさんも元気で登場！11歳の吉岡秀隆が演じた満男は、今どこでどんな仕事を？そして、本作でそのお相手となる準マドンナは誰？ストーリー展開は？

「とらや」のお茶の間に座って昔話に花を咲かせれば、誰でも、あの顔、この顔、そしてあのシーン、このシーンが蘇ってくるはずだ。2020年のお正月は、断然本作で！



## ■寅さん亡き今、甥っ子の満男が主役に！■

寅さんシリーズに寅さんの甥っ子である諏訪満男が登場したのは、『男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎』（81年）から。満男を演じた吉岡秀隆が11歳の時だ。以降49作までずっと満男は寅さんから愛され続け、満男も「寅おじさん」を頼って成長してきた（？）から、『男はつらいよ お帰り 寅さん』と題された記念すべき第50作で満男を主役に設定したのはある意味で当然。満男の父親・博（前田吟）、母親・さくら（倍賞千恵子）は既に「後期高齢者」になっているから、寅さん亡き今、主役を張るのはとても無理。年齢から考えても、満男を主役にしたのは当然だ。

もともと、過去の全49作の中で次々と登場してきたマドンナたちの中でも、寅さんが最も愛した女性はリリー（浅丘ルリ子）だから、リリーを主役として登場させる手もない

ではないが、リリーが知っている寅さんはやはり限定的だから、過去49作の集大成たる本作の主演には役不足だ。

山田洋次監督も1969年の高度経済成長期に登場した寅さんシリーズが49作も続くとは思っていなかったはずだ。しかし、パンフレットにある「山田洋次監督のコメント」では、「そして今、先行き不透明で重く停滞した気分のこの国に生きるぼくたちは、もう一度あの寅さんに会いたい、あの野放図な発想の軽やかさ、はた迷惑を顧みぬ自由奔放な行動を想起して元気になりたい、寅さんの台詞にあるように『生まれて来てよかったと思うことがそのうちあるさ』と切実に願って第50作を製作することを決意した」と述べている。そんな本作で主演を務める満男は、どんな物語で私たちに「生まれて来てよかったと思うことがそのうちあるさ」と思わせてくれるのだろうか。

導入部で桑田佳祐が歌う、お馴染みの主題歌を聞きながら、そんな期待で胸がいっぱいに！

## ■□■物語は諏訪瞳の7回忌から。そこに集うメンバーは？■□■

吉岡秀隆は多くの映画やドラマに出演し、どんな役柄でも見事に演じ分ける万能役者だが、一番印象に残っているのは、やはり『ALWAYS 三丁目の夕日』シリーズ(05~12年)、『シネマ9』258頁、『シネマ16』285頁、『シネマ28』142頁)における小説家・茶川竜之介の役。そこで、私と同じ思いを持っている(?)山田洋次監督は、本作の主演として登場させる満男を「サラリーマンを辞めて念願の小説家になった男」と設定した。今、彼は中学3年生の娘ユリ(桜田ひより)とマンションで2人暮らしだが、それは妻が6年前に亡くなったため。しかして、今日は、妻・瞳の7回忌の法要が葛飾の実家で行われるらしい。

私が2017年6月に訪れたことのある、葛飾・柴又帝釈天の参道にある草だんご屋「くるまや」は、今カフェに生まれ変わっていた。しかし、その裏手にある、昔のままの住居には博とさくらが暮らしていたから、法事を終えた後、満男が両親や親戚、付き合いの長い近所の人々との昔話を花を咲かせていると、伯父・寅次郎(渥美清)との日々を思い出すことに……。満男のそんな思いを受けて、スクリーン上にチラリチラリと登場する寅さんは、もちろんあの風貌。そして、あの服装に、あの帽子姿で、右手にかばんを持った寅さんだ。

満男が書いた小説の評判は上々で、出版社の担当編集者・高野節子(池脇千鶴)からは次回作の執筆を勧められているうえ、近々サイン会も予定されていた。博・さくら夫婦にとって、寅さんシリーズの中で家出を繰り返し、いろいろと手を焼かせてきた息子の満男がここまで成長し、それなりに世間様から認められているのは万々歳。しかし、法要後のおしゃべりの話題になったように、娘との2人暮らしが7年も続いているのだから、そろそろ再婚してもいいのでは……。ちなみに、娘・ユリは、担当編集者として色々と

世話を焼いている節子なら母親になってもらってもいいと思っているようだが……。

## ■□寅さんにはリリー！満男には泉！満男と泉の再会は？■□

浮気モノ(?)の寅さんには、過去の49作すべてに美しいマドンナが登場したが、日本国中が寅さんのベスト・マドンナと認めるのが、浅丘ルリ子が演じたリリー。『男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花』(80年)では、博・さくら夫婦の“願い”を受け止めたリリーの思いがけない返事によって、寅さんとリリーは世帯を持つ直前まで進んでいたが……？

そんな風に大人同士の恋模様を展開した(?)寅さんVSリリーと違い、いかにも純情で淡い恋心をぶつけ合っていたのが、高校生の満男と及川泉(後藤久美子)だった。1980年代から90年代にかけて人気絶頂だった美人女優・ゴクミこと後藤久美子は、『男はつらいよ ぼくの伯父さん』(89年)から登場しているが、今はどうしているの?山田脚本では、満男とは大違いの優等生だった泉は、今、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の職員として英語、フランス語を操りながら諸外国を飛び回っているキャリアウーマンらしい。映画とは便利なもので、どんな脚本を書くかによって、世界中を駆け回っている泉を、ある日突然日本に戻すこともできる。しかも、上司の粋な計らいによって、泉は久しぶりに2日間を東京でゆっくり過ごすことに。さらに、たまたま泉が行った書店で、何と初恋の人・満男のサイン会に出くわすことに!

恥ずかしがり屋の満男にとって、サイン会への出席はかなり勇気のいることだったらしい。そのため、少しデリカシーに欠ける(?)、朝日印刷のタコ社長(太宰久雄)の娘・朱美(美保純)から、「サイン会に出れば偶然の出会いがあるかも?」と言われたことが、勇気を出してサイン会に出席した1つの理由だった。しかして今、「名前も書いてください。名前はいずみ。スプリングの泉です」と言われた満男が慌てて顔を上げてみると……?寅さんにはリリーだが、満男には泉!そんな2人の再会は?

## ■□リリーは元気!しかし、泉の父母は?■□

寅さんシリーズで最多5回のマドンナ役を務め、寅さんと世帯を持つ寸前までいったのが浅丘ルリ子演じるリリー。リリーの気っぶの良さには寅さんならずとも惚れてしまうのが当然だ。そんなリリーは、寅さん亡き今、さすがに日本中を旅から旅で巡る生活からおサラバし、東京で小さなジャズ喫茶を営んでいた。満男にとってそこは、誰かとゆっくり話すのに最適の場所だったらしい。そのため、書店でのサイン会を終えた満男は、泉をその店に案内することに。

お互いに初恋の相手で初キスを交わした2人が約20年ぶりに再会したのだから、積もる話があるのは当然。しかし、こんな場合、どこまで踏み込んだ話をしているのかが意外に難しい。泉は忙しい身だが、ラッキーなことに今晚と明日はフリー。すると、ひよっと

して満男が強引に誘えば、リリーが経営するジャズ喫茶を出た後、どこかに“しげこむ”ことだって……。昔の日活ロマンポルノならそんな展開になるところだが、寅さんシリーズではそれはあり得ない。本作では、定番通り(?)満男は泉を実家に連れて行くことに。

満男から泉が来訪することを聞いた博とさくらは大喜び。夕食の準備はもちろん、寅さんがいつもマドンナを泊めていた2階に泉を泊めてやろうと、掃除をし布団を干す張り切りようだ。博とさくらの泉に対するそんな親切は、昭和の高度経済成長期ならいかにもピッタリだが、平成から令和に移行した今の時代では、お節介が過ぎるもの?したがって、満男は「こんな汚いところに泊まってもらうのは迷惑だよ」と両親をたしなめたが、泉は意外にも「畳の上に布団を敷いて寝るのは久しぶり」と喜んでくれたから、さくらたちは大喜び。本作では、それが社交辞令ではなく、泉の本音のように演出されているからうれしい限りだ。

互いに「おやすみなさい」と言い交わして、泉は私もこの目で見た車屋の2階の部屋に上がっていったが、さて明日の予定は?

## ■□■泉の父親はケアセンターに！離婚した母親は?■□■

私は2人兄弟だが、私も1学年違いの兄も、大学に入学した時から故郷の松山を離れてしまったから、両親は2人だけで死ぬまで松山で過ごした。また、母親が先に死亡した後、父親は1人で老人ホーム(やケアセンター)に入ることなく、ヘルパーさんの世話になりながら時々ケア・マネージャーさんに来てもらう体制の中、1人で自宅で暮した。

それに対して、泉の父親・及川一男(橋爪功)は、今一人で神奈川にあるケアセンターに入っており、ほとんどベッド上の生活らしい。もっとも、泉の母親・原礼子(夏木マリ)はピンピンしているが、とうの昔に離婚しているから、このケアセンターを訪れることはない。すると、一男が亡くなったらそのお葬式はどうするの?私たち兄弟は故郷から離れていても日本国内に住んでいたから、親の葬儀はそれなりに処理できた。しかし、泉のように世界を飛び回るキャリアウーマンであれば、いざという時ホントにどうするの?しかも、それは近くに迫っているはずだ。その場合、泉本人が言うように、離婚した母親は赤の他人だから、当然泉が喪主にならなければならない。したがって、そこでは「UNHCRの仕事が忙しいから……」は何の弁明にもならないはずだ。久しぶりに戻ってきた日本で、そんな現実を突きつけられた泉は、「そうになったら、その時に考えるわ」と問題を「先送り」するしかなかったが、そこで満男から「僕もできるだけのことをするから」「売れない作家には時間だけはタププリあるから」と慰めてもらったのはありがたい限り。もっとも、多分それは映画の上だけのことで、もし、ホントにそんな現実になれば、たちまち困ることは必至だ。しかし、それは本作が描くテーマではないから、その点は問題提起だけで終えたが、わずか1日2日の間でそこまで互いの現実を語り合った2人には、ひょっと

して焼けぼっくりに火が・・・？

## ■□■メロン騒動は？2020年のお正月は本作で決まり！■□■

2018年10月6日からBSテレ東で土曜日に放送されていた『寅さんシリーズ』は、私にとって夕刊を読みながら、かつ夕食を食べながら観るのに最適だった。なぜなら、食事と新聞とTVをバランス良く時間配分しながらゆっくり食事するのは、直腸ガンと胃ガンの手術をした私の胃腸に最適だからだ。そんな、過去49作にのぼる寅さんシリーズの中でも、名場面中の名場面が『男はつらいよ 寅次郎相合い傘』(75年)で、「とらや」のお茶の間で展開されるメロン(の取り分)を巡るもの。

それは、寅さん宛に送られてきたメロンがちょうど食べごろになったとして、さくらやおばちゃんらが6等分して1口食べたところに、寅さんが帰ってくる場面。みんながメロンをおいしそうに食べている姿を見て、寅さんは幸せ感いっぱい「よし、じゃ、お兄ちゃんも1つもらおうか。じゃ、出してくれよ、オレの」と言ったものの、なんと寅さんの分は切り分けられていなかったからアレレ……。さくらから、「あ、お兄ちゃん。これ1口しか食べてないから……」とお皿が回されてくるのを見た寅さんは、さていかに？

ここでの寅さんの言い分は実にごもつとも。彼がこんなに理路整然と自分の主張の正当性を許えるのは珍しいが、まさに彼の言い分どおりだ。寅さん宛に送られてきた貴重なメロンを、寅さんのことを全く省みず、寅さん以外の家族だけで切り分けて食べるのは、まさにもっての外。これは、「たかがメロン如きで」という問題ではなく、人間の心のあり方の問題だ。「わけを聞こうじゃねえか。どうしてみんなの唾のついた汚ねえ食いかスを、オレが食わなくちゃならねえんだ」と怒った寅さんとおいちゃんがその後取っ組み合いの大ゲンカになってしまうからすごい。そんな姿を見て一喝したのがリリー。このリリーの“裁定”によってコトは収まるわけだが、山田洋次監督は『男はつらいよ 寅次郎相合い傘』におけるそんな名シーンを、本作のどんな場面で、どのように展開させるの？2020年のお正月は本作で決まり！

2019(令和元)年11月7日記